

騎士道研究の射程と可能性

—*The Study of Chivalry : Resources and Approaches* を読む—

長谷川千春

Notes on *The Study of Chivalry : Resources and Approaches*

Chiharu Hasegawa

はじめに

騎士道を専門的に研究することには、まず何に注目すべきかという問題が生じる。例えば、どの国、どの地域、いつの時代に焦点を合わせるかということで騎士道の持つ意味合いが大きく変わってくる。さらに、どの視点から研究するのかというのも大きな問題である。歴史的に実在した人物から時代背景や社会的・文化的な一面を捉え、そこから騎士道の諸相を浮き彫りにしようとする研究者もいれば、文学作品に見られる騎士の描かれ方を分析し、そこから騎士道がどのように表現されていたかということを見破ろうとする研究者もいる。

決して簡単ではない分野であるのにも関わらず、多くの研究者たちは騎士道というテーマを追求し続けている。この現象を顕著に表す例の一つとして、1988年にウェスタン・ミシガン大学が出版した *The Study of Chivalry : Resources and Approaches* がある。今となっては新しいとは言えないかもしれないが、騎士道を題材として研究する、もしくは教えるという立場になった時に必要になるであろう知識と方法が、文学・歴史、それぞれに精通する 20 人以

上の研究者たちによって広範囲かつ詳細に提供されている。

本稿では、ただでさえ騎士道概念を詳しく理解しようとすることに苦勞を要する事実や、欧米での研究に比べて日本では騎士道について説明する特定の教科書や概説書がまだ豊富ではないという事情を視野に入れて、*The Study of Chivalry : Resources and Approaches* を日本語で紹介するという方法をとる。まず最初に、本の構成や編者の序論を簡潔に紹介することで、この本の立場や役割がどのようなものになっているかということに触れる。次に、一つ一つの論考の要約を行うことによって、騎士道を研究することでどのような議論ができるのか、どのような方向性を持って議論されるべきなのかというところを紹介する。最後に、この本に関する書評で書かれたことを参考にし、どの程度の評価がされうるかということについて考察を行う。

構成、目的について

The Study of Chivalry : Resources and Approaches の特徴として、豊富な情報量が挙げられるだろう。この本一つあるだけで、騎士道とい

うテーマを持った切り口から、中世の文化、文学、歴史などに関してある程度の知識を手に入れることができる。700 ページという大量の情報をもつ 20 の論考は、4 部に分けられている。基本的に論文といわれる種類の寄稿は 10 ページ前後であることが多いが、この本の中では、一つの論考に平均すると約 30 ページ以上が割り振られている。さらに、本文の中身の濃さはもちろんのこと、注や文献リストも充実していることも読者にとっては重要な要素である。時には 100 を超す注がつけられた論考もあることから、情報をこと細かく丁寧に共有しようとする寄稿者たちの意図が伝わってくる。このようなことから、一つの論考を注や文献リストを含めてじっくりと精査することができれば、その論題に関する基礎知識を得ようとすることに苦労はしないであろう。

まず、この本の導入、騎士道研究の背景、主要な文献を挙げつつ洞察力ある解釈までも行っている編者の Howell Chickering が寄稿した“Introduction”の要約をここで行っておく。Chickering は、1980 年代前半のアメリカの中世研究者たちが、学生たちに中世について研究させるためには歴史的・文学的の両方からの学際的なアプローチが必要であるという方針があったことを、TEAMS: The Consortium for the Teaching of the Middle Ages という機関の動きを踏まえつつ説明している。この背景から、広範囲な定義が求められる騎士道というテーマが中世の学際的な研究に最も適した議題になるのでは、という見通しがあったことに触れている。また、騎士道(chivalry)という語の使い方は中世と現代ではそれぞれ異なった複数の意味があるということ、ラテン語、フランス語、ドイツ語での騎士を表す語の相違などを示しながら、騎士道を研究する際に生まれうる疑問が挙げられている。そして Chikerning は、寄稿者の議論、方法と関連させながら、また、こ

の本のいたるところで言及される研究者や作品を中心に扱いながら、騎士道を研究する際に実際にどのような方法が可能なのかという部分を掘り下げ、例を挙げつつ、読者の視野を広げようと試みているのである。

Part I, 'The Modern Study of Chivalry' について

1. Jeremy duQuesnay Adams, "Modern Views of Medieval Chivalry, 1884-1984" (pp. 41-90)

Adams は、中世フランス文学に造詣が深い Léon Gautier の騎士道に関する論考 *La chevalerie (Chivalry)* を発端として、イギリスの歴史家 Maurice Keen が著した *Chivalry* までの間の騎士道研究を、特定の視点から、百科事典のような形式で簡潔にそれぞれの項目を説明している。Adams は、騎士道の定義や、アメリカ、フランス、イタリア、スペイン、イギリス、ドイツなどの国ごとに騎士道研究がどのようになされてきたかということに着目している。さらにオランダの歴史家 Johan Huizinga、アメリカの中世学者 Sidney Painter など、騎士道研究を行う上で重要な著述家たちの項目が特別に設けられている。

2. Robert W. Hanning, "The Criticism of Chivalric Epic and Romance" (pp.91-114)

この論説は、文学の領域における騎士道に焦点が合わされている。「騎士道的な、騎士道の」という意味を持つ 'chivalric' という形容詞の意味の捉え方から「騎士道文学」(chivalric literature) をどのように解釈するかということで学者たちの研究方法に多様性が見られるということに問題点が挙げられている。叙事詩や騎士物語に精通し、今日の騎士道文学研究にも大きな影響を与え続けている W.P. Ker, R.W. Southern, Erich Auerbach, Eugène Vinaver, R. Howard Bloch らの研究に触れつつ、研究の

方法論を具体的に示している。

3. Elizabeth B. Keiser and Bonnie Wheeler, “Teaching Chivalry: From Footnote to Foreground” (pp.115-38)

論題が示しているようにここでは、大学で教える立場のものが、どのような視点を持って、何を材料にし、どのように騎士道というテーマを学生に教えるのかという疑問について議論がなされている。この寄稿は、北アメリカのウェスタン・ミシガン大学によって運営されているメーリングリスト 7500 人の中世研究者から得た 247 の返答に基づいているため、当時の実際の教育現場での様子を感じるためには貴重な資料となりえる。Keiser と Wheeler は英文学とそれ以外の言語、歴史、学際的視点などから具体的な書籍を列挙し、綿密な情報を提供している。

Part II, ‘Historical and Visual Approaches’ について

4. David Carlson, “Religious Writers and Church Councils on Chivalry” (pp.141-72)

Carlson はここで、宗教や教会がどのように騎士道と関わってきたか、そして、それらを視野に入れないことには騎士道の時代を理解することが困難になるということを提唱している。また Carlson は、11 世紀ごろ南フランスのポワティエで活躍した吟遊詩人たち、英雄を褒め称える意味を持つ武勲詩などの登場が世俗の騎士道文化の産物となったことにも留意している。そして Carlson は、1130 年から 1215 年までの間に教会会議での規律を整えるために書かれた戒律から、騎士の禁止事項などを挙げたものをはじめ、3 つのテキストを紹介している。

5. Bernard S. Bachrach, “Caballus et Caballarius in Medieval Warfare” (pp.173-212)

Bachrach は、現実的な騎士の生活があまり着目されてきていないという点に問題意識を持

ち、基本的な生物学、獣医学、生態学の要素にも目を配り、中世の馬とその役割について議論を行っている。ノルマン人侵攻の様子を取めたものとして今でも貴重な資料とされている Bayeux Tapestry に描かれた騎士たちの姿を参考図として用いることで、Bachrach は、鎧の役割がどのように変容していったかという説明をしている。

6. Helmut Nickel, “The Tournament: An Historical Sketch” (pp.213-62)

ここで Nickel が注目するのは、馬上槍試合の役割とその文学作品での描かれ方である。当初は非常に危険な戦闘の訓練として用いられていた槍試合の本質を見ながら、アンジュー公伯爵・ナポリ王 René d’Anjou の槍試合に関する記述、イングランド王の中でも勇猛さで有名な Richard the lion heart, 槍試合で名を馳せた William Marshall など歴史上の人物や事柄に関して詳細に説明が加えられている。それだけでなく、Nickel はアーサー王伝説の起源を描く作品の一つである Geoffrey of Monmouth の *The History of the Kings of Britain* や、中世フランスでアーサー王伝説にロマンティックな要素を付け加えたことで知られる Chrétien de Troyes における描写などにも気を配っている。さらに 11 の絵画や写真を用いて、その図解から生まれうる解釈を行っている。

7. Rosemary Ascherl, “The Technology of Chivalry in Reality and Romance” (pp. 263-312)

人文系の学生の視野を広げるだけでなく、科学系の学生の興味を引き付けるという主旨も含まれるこの論考は、理系の思考が欠かせない。Ascherl は、騎士が身に着けていた鎧、または鎖帷子の製作過程では、鉄や鋼の原石を 1083 度まで熱することが必要になる、という製作段階を紹介し、それを具体的に形にしていくための装置や細かい部品までも図を利用し、説明してい

る。また、騎士が突撃する際に重要な役割を果たす槍についての考察や、剣の研ぎ方、そして長弓、クロスボウ、さらには火器にいたるまでの解説を加えている。そのうえ、文学作品に上のような技術がどのように描かれているのかということまで指摘することで、文学と科学が中世から密接に関わってきたという考察を行っている。

8. Brigitte Bedos Rezak, "Medieval Seals and the Structure of Chivalric Society" (pp.313-72)

この論考において、中世では印章にどのような役割が持たされていたか、またその歴史、そして女王、教会、町、職業などのイメージが印としてふんだんに組み込まれていたことが説明されている。さらには、時代ごとの捺印を読み取ることで、中世の印章自体に多くの問題点や、議論すべき点が多くあることを知らせてくれる。Rezek はさらに、紋章、鎧、盾や剣、文学からの影響などから騎士のイメージが印章に使われていたということを豊富な図説とともに証明している。

9. Linda Seidel, "Early Medieval Images of the Horseman Re-viewed" (pp.373-400)

この論考は、建築物などに見られる馬上の人物に着目し、文字から読み取るというよりも視覚的に訴えかける刷新的な思考を刺激するような芸術作品を見ることを目的としている。Seidel は教会の正面に掲げられたレリーフ、ローマ皇帝 Marcus Aurelius の彫像、彫刻作品やペルシアの手の込んだ絵が描かれた鉢など、多岐にわたる図を例として挙げ、騎馬行為が古代から人々に大きな影響を与え続けてきたということを証明している。

Part III, 'Teaching Early Chivalric Literature' について

10. Margaret Switten, "Chevalier in Twelfth-century French and Occitan Vernacular Literature" (pp.403-48)

Switten は、「騎士」を意味する 'chevalier', 'miles', 'caballarius' の変容について触れ、古フランス語の叙事詩 *The Song of Roland* やその他吟遊詩人たちの詩に関する研究者たちの議論なども取り入れながら考察を進めている。Switten は、12 世紀のフランス文学における騎士が単なる戦う者だけでなく、詩人にも恋人にもなりえるという戦士像の変遷や、キリスト教化された騎士たちの姿に着目し、当時の騎士道文学の本質の多様性を浮き彫りにしようと試みている。

11. Nancy Bradley-Crome, "The 'Recreantise' Episode in Chrétien's *Erec et Enide*" (pp.449-72)

アーサー王伝説に感情豊かな要素を付け加えた詩人が描き出した、騎士道と結婚の両立という問題に着目したこの論考は、*The Song of Roland* で強調されていた、王や国のために戦うという行動規範からは移り変わり、個人の騎士としての価値を高めようとする騎士の行動原理の変化に重要性を見出している。このような文脈で基本的に「臆病者」を意味する 'recreante' という単語の用例に焦点を当て、テキストの紹介を行っている。

12. Jill P. McDonald, "Chivalric Education in Wolfram's *Parzival* and Gottfried's *Tristan*" (pp.473-90)

McDonald は、中世ドイツアーサー王文学で重要な二つの作品から、それぞれの騎士としての成長の類似と相違を比較対照している。例えば、トリスタンは形式張った教育を受けている一方で、パルツィファルは無計画に騎士として

の心得を学んでいくという点で違いが見られる。しかしながら、McDonald は、戦士、キリスト教徒、貴族、廷臣として求められる彼らの資質は同様であるという点も見過ごしていない。

13. Dennis M. Kratz, "Using Translation" (pp. 491-508)

学生の立場に立ち、ヨーロッパに広く普及していた価値観である騎士道を学ぶためには翻訳が必要不可欠であるという視点を持ち、Kratz はこの論考をまとめている。中世イギリス文学で重要である Geoffrey Chaucer の *Roman de la Rose*, また *The Song of Roland*, そして Chrétien de Troyes の *Lancelot* などの翻訳を例として用い、翻訳をする過程に学生を参加させることは、批評的な思考を生み、洞察力ある読者として学習する機会を生むということを強調している。

Part IV, 'Teaching Later Chivalric Literature' について

14. Charity Cannon Willard, "Christine de Pizan on Chivalry" (pp.511-28)

Willard は、騎士道や戦術に関する論説を残している中世後期フランスの女性 Christine de Pizan の生涯を紹介しつつ、彼女の仕事とそれに関する重要事項を順に解説していき、最後に 3つのテキストを紹介している。Willard は、事実上、Pizan が軍隊の技術に大きく貢献したと断言するには限界があるかもしれないが、若い騎士たちの教育という意味合いでは、彼女の存在は大きいであろうし、興味深い事実である、という見解を示している。

15. Dhira B. Mahoney, "Malory's *Morte Darthur* and the Alliterative *Morte Arthure*" (pp. 529-56)

Mahoney がここで着目しているのは、直接的には関係がないと考えられる古英語による英

雄詩 *Beowulf* とアーサー王文学を比較することは、英雄の資質や騎士道という観点から見た場合、有効な研究対象になりえるという解釈である。Mahoney は、Thomas Malory による *Le Morte Darthur* の中で描かれる騎士たちがラテン語から派生している 'honor' よりもアングロサクソンに起源をもつ 'worshyp' を多用している部分に着目している。そこから *Beowulf* における死を賭しても恥を嫌い己の名誉を守ろうとする行動原理が、頭韻詩 *Morte Arthur* や *Le Morte Darthur* における騎士道的な描写に繋がっていくと主張し、テキストの紹介、参考文献の示唆をしている。

16. Anthony Annunziata, "Teaching the *Pas D'armes*" (pp.557-82)

ここでは、主に騎士同士の儀式化された戦いを意味する *pas d'armes* もしくは *passage of arms* が詳しく解説されている。Annunziata は、戦闘兵器などの発達で個人的な武勇が重んじられなくなってきた時代の中で、貴族階級にとって *pas d'armes* のような儀式的な行いは、個人の武勇を示す良い機会であった、という視点を確認しつつ、歴史的事実やアーサー王文学からの例をそれぞれ 6つのテキストから紹介している。

17. William T. Cotton, "Teaching the Motifs of Chivalric Biography" (pp.583-610)

Cotton は、騎士として模範となるような特定の偉大な騎士の生涯を描く、中世の武勇伝の役割について、それと似たような役割を持つ騎士道物語との比較なども試みながら、豊富な例・文献を提示しつつ、説明を行っている。そして Cotton は、武勇伝を研究することが、愛と宮廷作法、中世の戦争、また騎士道というテーマを論究することになるだけでなく、これらが誇張されるロマンスとは対照を成している事実を明らかにする良い機会になりえる、と主張している。

18. Gail Orgelfinger, “The Vows of the Pheasant and Late Chivalric Ritual” (p.611-44)

Orgelfinger は、1454 年に Philip III, Duke of Burgundy が開いた晩餐会で、トルコ人に占領されていたコンスタンティノープルを奪回することを金で飾られたキジに誓うが、それは果たされなかったという出来事に着目している。Orgelfinger の主な目的は、この儀式的な誓いの文学的、歴史的前例となる証拠を再評価することであり、それとともに、中世後期中でこの出来事が騎士道という価値体系の中でどのように再検討できるか、という問題にも取り組んでいる。

19. Jennifer R. Goodman, “Caxton’s Chivalric Publications of 1480-85” (pp.645-62)

Goodman は、騎士道が眩い光を放つほど輝いていた中世後期、イングランドで最初に出版を始めた William Caxton の騎士道概念に関わる数多くの出版物に注目し、この論考をまとめている。古き良き時代の騎士道が忘れられているという Caxton の嘆きを見つつ、13 世紀後期のカタルニア語で書かれた Ramon Lull の *The Book of the Order of Chivalry*、アーサー王伝説の集大成ともいべき Thomas Malory の *Le Morte Darthur* など、騎士道をよく表す作品を精力的に出版していた人物とその活動を精査することに Goodman は重きを置いている。

20. Robert L. Kindrick, “The ‘Unknightly Knight’: Teaching Satires on Chivalry” (663-82)

この中で Kindrick が着眼しているのは、14、15 世紀の騎士道風刺作品を考察することで、騎士道の現実を見ることができるだけでなく、騎士道の理想主義の本質の理解に役立つという部分である。ドイツ、フランス、イギリスにおける中世の作品を例に用いながら、また必要に応じて “Monty Python and the Holy Grail” な

どの現代の映画作品との関係などにも言及しつつ、Kindrick は、騎士道を風刺した作品の重要性を確認している。

書評と考察

1992 年、John W. Baldwin は *Speculum* の中で Chikerning と Seiler の *The Study of Chivalry* に関する書評を発表している。ここではまず、この本が出版されることになった経緯や目的が触れられ、一部ごとの要約がなされている。また Baldwin は、歴史家は基本的には歴史と創作の違いを一致させようとする試みを放棄する傾向があり、一方で、文学者はテキストに見られる騎士道の本質を明らかにしようとする部分を見るという対照的な方法について触れている。そして Baldwin がこの本に見る最も重要なこととして挙げているのは、例外を除けば、ほとんどの寄稿者が歴史と文学の専門的な境界線を越えようとせず、彼らのそれまでの研究能力を超えての思い切った試みを進んで行おうとはしてこなかった、という点である。この点から Baldwin は、歴史と文学の境界がそれほどはっきりとはしていない中世後期を対象とすることで研究がよりしやすくなるのではないかと、いう予想をたてている。そして、学際的な研究にはさらなる尽力が必要になるということを見据え、書評を終えている。

確かに、膨大な量ではあるがたった一つの本で、歴史・文学の両方の視点から騎士道の本質全てを暴き出そうとするのは難しい。そのうえ、Part II で行われた歴史的な視点での研究が 6 つなのに対し、Part III と Part IV の文学的アプローチを合わせると 11 というアンバランスな構成にも疑問が挙がる。Part III の中世前期の議論が 4 つなのに対して、Part IV の中世後期の議論が 7 つというバランスにも若干の不公平感を感じさせる。分野、時代、地域などによって騎士道の本質が変化するという特殊性に気を配ら

なければ、騎士道を論究しているつもりがさらなる迷路に迷い込んでしまうという危険性がある。

このような危険性も孕みつつ、誰もが避けたがるような困難な試みをしたことによって生まれる、決定的で評価すべき点は、研究者たちに限りない可能性を与えたという点であろう。この本が目標としている、学部生と彼らを教える講師たちに有益となるような材料と視点を示すということに関しては、個々の文末脚注と参考文献の豊富さをみれば一目瞭然である。さらに重要なことに、ほとんどの執筆者が論考の締めくくりに、授業での議題・討論のトピック、学生への課題などを提示するにとどまらず、講師への授業方針の示唆や提案を行っている論考もある。ここに見られるように、難しい論題を追求しつつ、その後に建設的で洞察力ある質問を投げかけることで、読者、もしくは研究者に、さらなる独創性を求め、後の研究の発展に繋げようという工夫がなされている。

おわりに

The Study of Chivalry を精読するにあたり、以下のようにまとめることができる。まず、Part I では、騎士道という概念はどのように研究されうるか、またどのような解釈がなされてきたか、そして当時どのような研究方法や方針がとられていたのか、ということを見ることができた。Part II は、主に歴史的な立場から、様々な主題—宗教・教会、馬の存在、馬上槍試合、武器防具の製作過程や役割、印章、建築物・レリーフに描かれる乗馬のイメージを包括していた。中世前期の騎士道文学に着目した Part III では、12世紀のフランス文学、Chrétien の *Erec*、ドイツのアーサー王文学における騎士の教育、翻訳テキスト使用の有用性などが扱われていた。中世後期に焦点を絞った Part IV では、フランス女性著述家の騎士道観、アングロサク

ソンの英雄性とアーサー王文学の騎士道観の関連、儀式的な騎士同士の戦いの意義、武勇伝、誓いの意味するもの、イングランドの出版業者 Caxton、風刺作品に見られる騎士道の本質、というように、多くの問題点が議論されていた。そして最後に、学際的研究の困難さや危険さを書評の記述から読み取る一方で、この本の達成した建設的で洞察力のある面にも触れた。

騎士道を研究することは非常に難しいのみならず、何から始めていいかわからないといった問題も発生するであろう。しかしながら、*The Study of Chivalry* の充実した材料と問題提示を参照することで、学生、講師、さらには研究者の視野を広め、より深い騎士道研究に導くことができる。この本は、騎士道研究をしようとする研究者にとってはもちろんのこと、中世の歴史、文化、文学の研究を試みようとする者にとっても、重要な参考文献になりえる。*The Study of Chivalry* が明らかにしているように、騎士道という概念に注意深く目を向けることで、騎士道に関連する数多くの議論すべき問題が見つかるのである。

参考文献

- Auerbach, Erich. *Mimesis: The Representation of Reality in Western Literature*. Trans. Willard R. Trask. Princeton: Princeton UP, 1953.
- Baldwin, John W. Rev. of *The Study of Chivalry: Resources and Approaches*. Ed. Howell Chickering and Thomas H. Seiler. *Speculum*. 67. 4. 1992: 944-46.
- Benson, Larry D. ed. *King Arthur's Death: The Middle English Stanzaic Morte Arthur and Alliterative Morte Arthure*. Exeter: U of Exeter, 1986.
- ……. ed. *The Riverside Chaucer*. 3rd ed. Boston: Houghton Mifflin, 1987.
- Benson, Larry D. and John Leyerle. eds. *Chivalric*

- Literature : Essays on Relations Between Literature and Life in the Later Middle Ages.* Kalamazoo : MI, 1980.
- Bloch, R. Howard. *Etymologies and Genealogies : A Literary Anthropology of the French Middle Ages.* Chicago : U of Chicago P, 1983.
- Bumke, Joachim. *The Concept of Knighthood in the Middle Ages.* Trans. W.T.H. and Erika Jackson. New York : AMS, 1982.
- Charny, Geoffroi de. *The Book of Chivalry of Geoffroi de Charny : Text, Context, and Translation.* Trans. Richard W. Kaeuper and Elspeth Kennedy. Philadelphia : U of Pennsylvania P, 1996.
- ……. *A Knight's Own Book of Chivalry.* Intro. Richard W. Kaeuper. Trans. Elspeth Kennedy. Philadelphia : U of Pennsylvania P, 2005.
- Chickering, Howell D and Thomas H. Seiler, eds. *The Study of Chivalry : Resources and Approaches.* Kalamazoo : Western Michigan U, 1988.
- Duby, Georges. *The Chivalrous Society.* Trans. Cynthia Postan. Berkeley : U of California P, 1980.
- ……. *William Marshal : The Flower of Chivalry.* Trans. Richard Howard. London : Faber, 1986.
- Eschenbach, Wolfram von. *Parzival.* Trans. A.T. Hatto. Harmondsworth : Penguin, 1980.
- Gautier, Léon. *Chivalry.* Ed. Jacques Levron. Trans. D.C. Dunning. London : Phoenix House, 1968.
- Girouard, Mark. *The Return to Camelot : Chivalry and the English Gentleman.* New Haven : Yale UP, 1981.
- Harper-Bill, Christopher and Ruth Harvey, eds. *The Ideals and Practice of Medieval Knighthood : Papers from the First and Second Strawberry Hill Conferences [1983, 1984].* Woodbridge : Suffolk, 1986.
- Huizinga, Johan. *The Waning of the Middle Ages : A Study of the Forms of Life, Thought, and Art in France and the Netherlands in the Fourteenth and Fifteenth Centuries.* Trans. Frederik Hopman. Harmondsworth : Penguin, 1972.
- Kaeuper, Richard W. *Chivalry and Violence in Medieval Europe.* Oxford : Oxford UP, 1999.
- Kaeuper, Richard W. and Montgomery Bohna. "War and Chivalry." *A Companion to Medieval English Literature and Culture c.1350-1500.* Ed. Peter Brown. Malden : Blackwell, 2007. 273-91.
- Keen, Maurice. *Chivalry.* New Haven : Yale U, 1984.
- Ker, W.P. *Epic and Romance : Essays on Medieval Literature.* New York : Dover, 1957.
- Klaeber, Friedrich, ed. *Beowulf and The Fight at Finnsburg.* 3rd ed. with 1st and 2nd supplements. Lexington : D.C. Heath, 1950.
- Llull, Ramon. *The Book of the Order of Chivalry.* Ed. Alfred T.P. Byles. London : the Early English Text Society, Oxford UP, 1926.
- Malory, Thomas. *The Works of Sir Thomas Malory.* Ed. Eugene Vinaver. Rev. P.J.C. Field. 3rd ed. 3 vols. Oxford : Clarendon, 1990.
- Monmouth, Geoffrey of. *The History of the Kings of Britain.* Trans. Lewis Thorpe. Harmondsworth : Penguin, 1987.
- Monty Python and the Holy Grail.* Dir. Terry Gilliam and Terry Jones. Perf. Graham Chapman and John Cleese. 1974. DVD. Sony Pictures, 2006
- Painter, Sidney. *French Chivalry : Chivalric Ideas and Practices in Medieval France.* Ithaca : Cornell UP, 1964.
- Pizan, Christine de. *The Book of Deeds of Arms and of Chivalry.* Ed. Charity Cannon Willard. Trans. Sumner Willard. University Park :

- Pennsylvania State UP, 1999.
The Song of Roland. Trans. Dorothy L. Sayers.
Harmondsworth : Penguin, 1978.
- Southern, R.W. *The Making of the Middle Ages*.
London : Hutchinson U Library, 1953.
- Strassburg, Gottfried von. *Tristan*. Trans. A.T.
Hatto. Harmondsworth : Penguin, 1967.
- Troyes, Chrétien de. *Arthurian Romances*. Trans.
William W. Kibler and Carleton W. Carroll.
London : Penguin, 2004.
- Vinaver, Eugène. *The Rise of Romance*. Oxford :
Clarendon P, 1971.